

〈書評〉

田尻芳樹 著

『J・M・クッツェー——世界と「私」の偶然性へ』

(三修社、2023 年)

 朴 舜 起

ただの文学研究書ではない。副題が示すように、本書が問うのは存在することとそれ自体に関わる痛切な「私」の問題である。しかもこれはクッツェーという作家の「私」のみを意味しない。例えば田尻氏が『恥辱』の章で「中年の危機」について語る際、「このテーマは、若い学生に言っても（当然ながら）ちっとも理解してもらえないし、主題的に論じられているのを見たこともないが、私にとっては非常に明確で、かつ痛切にも感じられる」（138）と言う時、読者はそこにクッツェーのみならず、田尻芳樹という「私」の「痛切」な問題を見ることができる。本書の魅力は、問いの対象とされるのがクッツェーであると同時にそれを問う田尻氏本人でもあり得るような、この根源的な問いのスタイルにあると言ってよい。

注目すべきは補論2だ。田尻氏はそこで、哲学者永井均の「ある特定の人物に関する偶然性」と「ある特定の人物であることの偶然性」という二つの考え方に言及する。簡単に言えば、前者（「関する偶然性」）は例えば田尻氏が文学者ではなく俳優だったりする偶然性を、そして後者（「であることの偶然性」）は田尻氏が他の誰か、例えば大谷翔平でもあり得たはずなのに、なぜか田尻芳樹であることの偶然性を意味する。また、「関する偶然性」は田尻氏が田尻氏であることの必然性から展開する様々な可能性（作家／音楽家／書道家だった

かもしれない)へと開けてゆくが、「であることの偶然性」は、そもそも田尻氏がなぜ田尻氏でなければならなかったのか、という不条理を喚起する。ただし、「であることの偶然性」からでなければ問うことのできない痛切な問題がある。それは「この私」という次元だ。例えば、人は唐突な不幸に直面した時、「なぜこの私なのか」という強烈な不条理に突き当たる。田尻氏は、クツツエーが度々抱える「私」の問題もまた、「であることの偶然性」(不条理)へと行き着く「この私」の問題なのだという。

実際、読者は田尻氏のこの分析がクツツエーの小説を読む際にあまりにも有効であることに驚いてしまうだろう。例えば最新作の『ポーランドの人』(くぼたのぞみ訳、白水社、2023年)はある種の恋愛小説で、そこには「私」(作品の中心人物となる女)がこの男(ポーランド人ピアニスト)に好かれるのは何故なのか、という問いが常に漂っている。だから読者はこの小説に、様々な選択肢/可能性の中で選ばれるのはなぜ「私」なのか、という恋愛的な枠組みを自然と想起するはずだ(これは「関する偶然性」に近い)。しかし一方で、小説には以下のような場面も挿入される。

ハイウェイの、マルグラットへ向かう分岐点の近くで、交通事故の現場を通り過ぎる。もつれた金属片、警察の車、救急車。ゾットする。あれがわたしだったら？ みんななんていうかしら？「ジローナで何をしていたの、彼女？」(51、強調原文)

分岐点付近での交通事故。小説の主題(恋愛)に関わらないほど些細な、一瞬の場面だ。実際、人は恋愛に強い因果(運命)を感じるが、交通事故などは誰にでも理由なく唐突に起こる。事故は単に偶然というより、不条理だからだ。故に女はその不条理感を、「あれがわたしだったら？」という日常的な物言いでの確に言い表す。事故は女の身に起きたものではない。それはほんの数行のみ言及される、女とは何の関係もない他人の身に起きた唐突な不幸に過ぎない。しかし、田尻氏が指摘する「であることの偶然性」は、全くもって日常的なこの女の言葉で暗に仄めかされていると言ってよい。なぜなら「あれがわたしだったら？」というこの問いは、「なぜこの私でなければならなかったのか」という不条理への問いかけの、裏返し=分岐先だからだ。

実はこの交通事故の場面は、小説の結末と響き合っている。結末で参照されるのは、小説後半で唐突に死ぬポーランド人が女へと書き残したとされる詩篇

への、女からの遅れた手紙の返事だ。女はなぜ死者へとわざわざ手紙を書くのか？ 重要なのは、手紙を実際に読むのは誰なのか、ということである。それは、このポーランド人とは何の関係もないこの我々読者なのだ。つまり手紙がもたらす二者間の郵便的交換性は、不思議にもポーランド人と女ではなく、ポーランド人と我々読者との間で引き起こされている（故に、読者はなぜかポーランド人と奇妙な代理的カップル関係を取り結ぶ）。ここで再び、交通事故の場面を思い出されたい。女はそこで、自分に関係のない交通事故（他人の「死」の可能性）を横目に、「あれが私だったら？」と交換的に問うていた。一方、読者はポーランド人が「死んだ」という事実を横目に、ふと気づくと彼が読むはずの手紙を、彼の代わりに読んでいる。この時、読者はこう思うはずだ。この手紙を読むのは、なぜこの私なのかと。

問いは裏返され、この我々へと分岐する。ここから更に、小説の主題（恋愛）を問い直してもよい。女は手紙の中で、ポーランド人が死に瀕して書いたある一節、詩篇のどこにも収まらないが故に「エクストラ・ポエティック」と名指される、「助けてくれ、私のベアトリーチェ」という一節に触れている（199）。そこで女は、「私のベアトリーチェ」とはダンテの想い人なのか、それともこの私ベアトリス（ベアトリーチェのスペイン語読み）なのか、どちらなのかと問う。ポーランド人はダンテに相当入れ込んでいた（彼はピアニストのくせに詩篇を書いているのだ）。だからひょっとすると、女は単にベアトリーチェの代わり（同じ名前の女）だったのかもしれない。しかし、結局の所ポーランド人もまたダンテではなく、女もベアトリーチェではないのだが、彼の詩篇を読むのはこの女に他ならない。つまり、「私のベアトリーチェ」が誰なのかというこの問いは、詩篇を実際に読むこの女にしか生じ得ない。交通事故が日常の裏返しであるように、他の誰でもあり得るということ、そして代理的であるということが、むしろ逆説的に「この私」という不条理を突きつけるのである。

故に、クツツェーは手紙という交換媒体を通じて、女からの返事を死者に代わって実際に読むこの我々＝小説の読者、という次元を引き出すのだろう。このような視点の繰り上げは唐突だろうか？ しかしそうしているのはクツツェーだけではない。田尻氏もまたクツツェーに関する評論を終えたこの本の後半、補論として、「柄谷行人」や前述の「永井均」を通じて「私」という問題について、つまり田尻芳樹という読み手の個人的関心へと言及し始めるからだ。あるいは、恋愛という主題ではなくほんの一瞬描かれる事故の場面、そして詩篇本編ではなくそのエクストラ（余剩的）・ポエティックにおいて「この私」

という問いを仄めかすクッツェー同様に、田尻氏もまた、「であることの偶然性」という概念をクッツェー読解へと導入する核心的な章に、あえて補論という余剰的章名を付けるのである。つまり、二人の「偶然性」へのアプローチは、不思議と相関的なのだ。

網羅的なクッツェー作品の解説／論評であり、南アフリカ、動物、ベケット等々、クッツェーを読んで語る上では必須のテーマが掬い上げられつつ、各章が作品出版年順に並べられ、年譜がつき、文献案内まである本書は、クッツェーに興味を持つ読者にとってこの上ない助けとなるだろう。しかし、そのような完成された作家評論という側面を飛び越えた余剰的魅力が、唐突に、まさに交通事故のように挿入される補論2にはある。そしてそこで問われる「この私」の偶然性という問題から、読者は、今度は逆に田尻氏とクッツェーという「二人の私」の相関的な偶然性（ある種のペア／カップル性）について思い巡らすこともできる。というのも、田尻氏は決してクッツェーに関する本を書いたのではないからだ。本書には、田尻氏が選んだその対象がJ・M・クッツェーであることの偶然性が損なわれずある。であればそれは、今度はこの書籍を読む我々読者の偶然性として回帰するに違いない。故に問いはクッツェーから田尻氏へと再帰し、読者は再度こう思うのだ。この本を読むのは、なぜこの私なのかと。